

まいど！ざいむ局です！



関西元気企業

～大阪人の心のシンボル～

ご紹介する元気企業は、大阪人の心のシンボル「通天閣」を管理・運営する通天閣観光(株)です。大阪の一大観光地として栄える新世界の街に灯りを灯し続けてちょうど100周年。しかし、ここまでの道のりは決して平坦なものではなく、困難の連続。笑いあり涙ありの新世界・通天閣の人情物語を通天閣観光(株)の名物社長 西上氏に語っていただきました。

● 通天閣建設のきっかけは。

1903(明治 36)年、日本初の本格的な万国博覧会である第 5 回内国勸業博覧会が今宮村(現在の大阪市西成区)で開催されました。会場には、連日 2 万人以上の入場者が押しかけ、博覧会は大盛況だったようです。

閉幕後、跡地を利用した「理想的共同娯楽園づくり計画」が持ち上がり、1912(明治 45)年、「通天閣」と「ルナパーク(遊園地)」を目玉施設とした「新世界」が誕生したんです。

ちなみに、初代通天閣は、パリのエッフェル塔と凱旋門をモデルにしています。塔と言えば「エッフェル塔」、門と言えば「凱旋門」、それじゃあ、「両方足してしまえ！」という、大阪人らしい発想です。

● まるでディズニーランドのような写真ですね。

これが、ルナパークです。当時、「5 銭払えば夢の国」という謳い文句で大賑わいだったようです。通天閣はルナパークの入場門として人気を博し、周囲には新しい店が建ち並び、映画館や演芸場、レジャーセンター、ラジウム温泉などが作られ、それらを 5 万余のイルミネーションが照らす光景は、さながら荒野を開拓したラスベガスの様相だったそうです。

ところが、こうした賑わいも長続きはせず、1923(大正 12)年、ルナパークは閉園となりました。いつの時代もピーターを取り込むのは大変です。

昭和期に入って、新世界は一時的に活気を取り戻すのですが、今度は通天閣に悲劇が襲ったんです。

企業情報

名称 通天閣観光株式会社
所在地 大阪市浪速区恵美須東 1-18-6
代表者 西上雅章
従業員 30 名
資本金 105 百万円

* 通天閣(初代) 1912 年～1944 年
(2 代目) 1956 年～現在

HP <http://www.tsutenkaku.co.jp/>

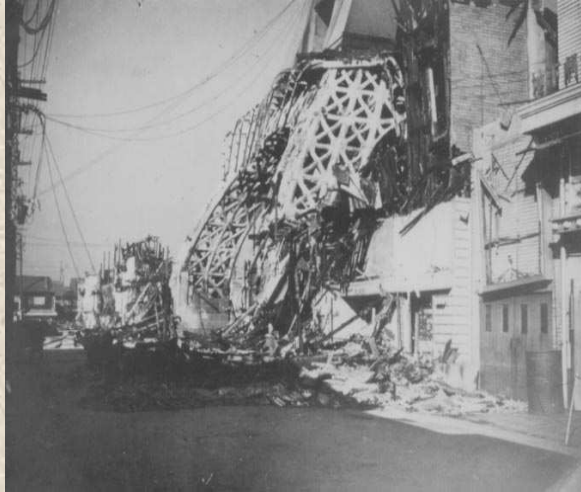


通天閣の名物社長
西上 雅章氏



● 通天閣を襲った悲劇とは。

1943(昭和 18)年 1 月、通天閣のすぐ足元の映画館が失火で炎上し通天閣も真っ赤に焼かれました。無残にも鉄骨を晒し出した姿となった通天閣。折しも戦時中という状況から、持ち主であった吉本興業は塔を解体して、鉄材として供出することを決意しました。翌年には解体され、初代通天閣はこの世から姿を消したのです。光を失った新世界は暗い雰囲気が立ち込めていたそうです。



【(左) 鉄骨を晒す初代通天閣 (右) 解体される通天閣】

● 2 代目通天閣再建に関して苦勞されたお話があればお聞かせください。

通天閣の再建に向けては、新世界の人々が奔走しました。実は 2 代目通天閣の再建にも苦勞しましたが、再建後も苦難の連続でした。今も通天閣があるのはこの時、先代たちが努力したお陰なのです。そんな先代たちの苦勞話をご紹介します。

● 「通天閣人情物語(其の1)」

通天閣解体の翌年には戦争も終結しました。終戦後は焼け跡にトタン屋根の家が建ちはじめ、新世界にも徐々に復興の足音が聞こえてくるようになりました。

しかし、解体から 10 年近く経っても、通天閣再建の話は、一向に盛り上がりません。そうこうしているうちに 1954(昭和 29)年に名古屋テレビ塔ができたのです。このことをきっかけに、新世界の人々の“ど根性魂”に火がつき、一挙に再建機運が高まったと聞いています。

この時、町内会で再建の賛否についてアンケートをとったところ、出資の申し込みが1億円にもなったそうですが、いざ集めると、4分の1の2,500万円しか集まらなかったそうです。見栄っ張りな大阪人を象徴する面白いエピソードとして語り継がれています(笑)。それでも再建計画は進められましたが、中でも難航したのが、関係当局への手続きだったそうです。「道路上にタワーを建てることはまずい」ということになり、国会議員を訪ね、何度も何度も陳情を重ねたようです。ここには、執念のドラマがあります。

さらに、資金が少なかったことから泣き付く様に建設会社へ相談したところ、建設会社自身も資金を出資してくれるということで話が纏り、ようやく建設に漕ぎ着けたそうです。

● 「通天閣人情物語(其の2)」

開業(1956(昭和 31)年)後は、入場者が殺到。1ヵ月後には早くも20万人に達し、翌年には100万人超え。その後も新世界の街のシンボルとして多くの人々を迎えてきました。

しかし、開業から10周年を向かえた頃より暗雲が立ち込めはじめました。当時は高度経済成長期の真っ只中。東京ではオリンピックが開催され、世間は活況に満ち溢れていました。そんな好況期の負の面として姿を現しはじめた公害問題が通天閣を直撃しました。光化学スモッグです。この影響で通天閣からの眺望は悪化。

また、その後のオイルショックの影響で、ネオンの消灯を余儀なくされました。こうした2つの災難により入場者は激減。挙句の果てには株式を担保に借金経営へと転落する始末です。

この危機に立ち向かったのも、新世界の人々でした。まず、借金の担保に取られていた通天閣の株式をなげなしのお金を集めて買い戻しました。当時、私の父(当時:新世界連合会会長)は、新世界でほぼほとと食堂を営んでいましたので、金銭面は非常に苦しかったと思いますが、通天閣の危機に居ても立ってもいられなかったのだ

と思います。ようやくの思いで通天閣の経営権を取り戻し、一息ついたのも束の間、何と4000万円もの累積赤字が発覚したんです。新世界の人々は、皆無一文の中、地元のため、浪速っ子のため再び東奔西走。個人保証で資金を借入れ、設備の更新や借金返済に充て、傾いた通天閣を必死で引っ張り戻しました。まさに人情物語です。その後、私の父は、通天閣観光の社長に就任することとなったのです。

● 現在の通天閣、そして今後は

現在はお陰様で大盛況です。先代たちが必死で守りぬき、新しい魅力を創り出してきたように、常に大阪らしさとは何かを追求してやってきました。大阪らしさというのは、面白さだと思います。ビリケンさんや通天閣ロボ、その他にも様々な仕掛けや展示物で訪れてくれた人たちが思わずクスッと笑ってくれるような場所を提供してきました。その甲斐あって、最近では修学旅行生やカップル、女性同士のお客さんまで訪れるようになってきました。少し前では考えられません。今後も通天閣建設時から変わらない「娯楽の提供」を合言葉に新世界全体で協力して訪問者を笑かしまっせ！特に今年は初代通天閣開設から100周年です。だから、思いっきりやまっせ！



【ビリケンさん】

【通天閣ロボ】



<取材後記>

1世紀にわたり、人々に愛される大阪の名所であり続けた通天閣。それは、単なる鉄塔ではない。関わってきた多くの人々のロマンが鼓動となり、守り続けた新世界の人々の情熱が血となり、肉となって通天閣という命をつないできた。

だから、東京スカイツリーをみても、闘志やら根性が湧いてこないのに、通天閣を見つめると、何かを「やったるで！」という大阪人の「ど根性」みたいなものが湧き上がってくるのかもしれない。

戦後の焼け跡から立ち上がった庶民が、行政、専門家を巻き込み、大阪のシンボルとなる一本の塔を再建するまでには、意地と執念のドラマがあった。

大阪には、こうした庶民の意地と執念のドラマが至る所に残っている。

例えば、御堂筋の拡張工事では、かなりの数の住民が立ち退きを余儀なくされたにもかかわらず、それが大きな問題にもならず、速やかに遂行された。その背景には、「街のためなら仕方ない」とする住民の強い思いがあったという。当時の住民の潔さや公共心の高さには感服する。

こうした大阪人の精神は、時代を超えて脈々と受け継がれ、その結果として、今の大阪がある。「民」によって守られ、育てられてきた誇り高き都市、それが「大阪」なのだ。



掲載している情報は、平成24年7月時点のものです。